

書評

『エコノミストたちの栄光と挫折』



竹内 宏 著／
東洋経済新報社刊／
2,100円（税込）

本書のテーマは、「路地裏の経済学」で一世を風靡した銀行エコノミスト竹内宏と、彼と歩んだ戦後日本経済の栄光と挫折の歴史である。マルクス経済学を学び日本長期信用銀行に就職した著者は、必然の結果として主流の融資部門ではなくその特異な才能をフルに発揮できる調査部に配属される。地道な現場調査とずば抜けた直観力で、ダイナミックな経済や企業の動きの背景にあるものをえぐり出し、個性的な調査部を育てた。現状に対する批判に二、問題の本源をとらえる思索が四、問題の対策四の割合で、現実に柔構造の対応ができるエコノミストが著者の理想だった。

高度成長期から八〇年代にかけて、次々と新しい産業分野を分析し紹介することで、長

銀調査部の存在感は高まった。しかし、グローバリゼーションとアメリカ流の金融の到来は、銀行の収益に直接貢献しない調査部を無用の長物としていった。バブルの破綻とともに収益的な自立を迫られた長銀調査部は漂流を始め著者の役割もエコノミストのリーダーから経営的なそれに変貌していく。著者はその銀行員生活のほほすべてを調査部門で過ごすことで、一〇〇名にも達するエコノミスト人材を育てたが、路地裏から本質を突く柔軟な才能は、主として女性エコノミスト達により引き継がれているようだ。余裕がなくなった現在の銀行にはこのような調査部は抱えられない。しかし、これからの邦銀再生のヒントはアメリカ流の組織モデルではなく、竹内調査部が望んで道半ばとなった、地域や新しい産業の動きに目を配り経済発展に貢献できる道を探ることにあるのではないだろうか。

（評者・九州大学経済学研究
院教授 久原正治）